大学教育・高校教育

大学入学試験は大学教育と高校教育との接点にあり、大学入学試験の在り方は、大学教育にも高校教育にもいろいろな面で大きな影響力をもっている。例えば、大学側から見れば、それぞれの大学の各学部・学科における大学教育にふさわしい学生を合格させようという努力が、大学入学試験によってどの程度効果的に行われ成果を修めているかが大きな問題であろう。この問題を調査する目的で、大学入試センター研究部で調査研究した結果が、国立大学入学者選抜研究連絡協議会第8回大会で発表されている。すなわち、各学科について共通第1次学力試験の配点（傾斜配点を加味して）と第2次の学力試験との配点の合計の高い方から並べた順位を、その教科の基礎学力の重視順位とみなし、一方、共通第1次学力試験教科別の得点分布、平均得点、標準偏差の歪度などを基礎学力の指標として選び、志願者集団と合格者集団についてそれぞれの指標に基づく基礎学力順位を求め、上記重視順位との関連を調べてみると、特に多くの医学系学部では、基礎学力分布に関して、上記3指標すべてについてよく合致（マッチング）しているが、他の学部では様々なマッチングの状況がみられたことが報告された。

大学入学試験と大学教育とのかかわりという立場から、外国語教育（主に英語教育）についての研究が多い。共通第1次学力試験の英語と、第2次試験の英語の成績の相関を、志願者集団と合格者集団に分けて比較した研究、第2次試験の英語の内容や実施形態等の検討、中学・高校の指導要領の改訂による影響などを調査した研究、大学における外国語教育に関する問題点とその改善についての研究などがある。

また、国立大学入学者選抜研究連絡協議会の第3研究プロジェクト「現代学生像の把握と大学教育の課題」が継続（3年目）して行われている。

以上が昭和61年度における「大学教育・高校教育」の項に関する研究の動向であるが、高校教育と大学教育との連節化（articulation）の問題や、大学の一般教育の問題が、今後もっと研究対象として取り上げられることが望まれるのではないだろうか。